

財団レポート

弊財団では、設立当初から、「家庭医療・老年医療研究委員会」を立ち上げ、在宅医療・看護・介護現場における諸課題の研究に着手しております。今般、その研究の1ステップとして、第19回日本在宅医学会大会（6月17日～6月18日、会場：名古屋国際会議場）にて口演を行いましたので、発表概要をお伝えいたします。



発表者
財団研究員 大久保 豪

発表タイトルは、「訪問診療医・訪問看護師に求められている連携と役割機能：両職種間におけるギャップの見える化から在宅医療の円滑化を再考する」でした。本発表の目的は訪問診療医と訪問看護師間の連携上生じるギャップの解消に向けて、その実態および発生構造・要因を明らかにすることです。研究委員会では2014年10月から2017年5月の間、訪問診療医や訪問看護師計15名のインタビュー調査を行い、その内容を分析し、議論を深めてきました。

その結果、訪問診療医と訪問看護師間のギャップとして、《在宅医療の知識に関するギャップ》、《在宅医療の意識や役割分担に関する考え方のギャップ》、《診療行為・看護行為におけるギャップ》があり、それぞれのギャップに対して職種間の《コミュニケーションにおけるギャップ》が大きな影響を与えているという全体図を作成しました。学会では各ギャップのより詳細な内容を発表すると共に、コミュニケーションのギャップとしては、コミュニケーション不足（存在しない、必要ない、苦手、言いがらい）、必要な時に方向性や指示がない、必要な時に報告・連絡・相談がないといったものが挙げられたことを発表しました。

また、研究委員会ではギャップの発生要因についても分析を進めており、パーソナリティによるもの、それぞれの専門領域が担ってきた役割の認識の相違、在宅医療の教育・学習が不十分、といった要因があるのではないかという内容を紹介しました。

今後はギャップの発生要因の除去などを通じて、コミュニケーションのギャップを埋め、診療行為や役割意識といったギャップをなくしていくこと、あるいはギャップがあったとしても患者・家族が望ましい在宅医療を受けられるような制度・環境作りに寄与していきたいと考えています。

なお、発表は一般演題口演として、6月18日（日）の13時10分～14時10分、第7会場にて行われました。改めて本インタビュー調査に協力をしてくださった皆さまに御礼を申し上げます。